



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2012年8月発行 第51号

(4ヵ月1回不定期発行)

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

- 日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援
- 貧しい国々での医療活動を支援
- 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

特集1：越後妻有・大地の芸術祭

表記の芸術祭が、現在新潟県十日町市越後妻有で開催されています。
(社)海外と文化を交流する会もふかくかかわっているオーストラリア
ハウス再建もなりました。以下はその報告と告知です。

9月17日まで開催しています。

■大地の芸術祭、越後妻有アートトリエンナーレ2012

大谷俊介 (社)海外と文化を交流する会会長

新潟県南部、「越後妻有（ツマリ）」と呼ばれる十日町津南町一帯は、棚田に囲まれた農村で昔からの暮しが残る里山。ここで世界でもユニークな芸術活動が展開されている。夏は緑豊かな田園だが冬は深い雪にすっぽりと覆われる、東京23区がまるごと入るこの広い地域に、国内外作家の現代アート作品が常時100点以上点在している。これらは「人間は自然に内包される」をコンセプトに2000年から3年に一度この地で開かれる「大地の芸術祭トリエンナーレ」の作品である。今年で5回目を迎えるこの芸術祭は、豪雪、地震、豪雨という大きな災害を乗り越え不屈の魂をもって7月末から開催されている。ここには44の国、地域から約360点の作品が参加し、世界最大規模のアート展として国内外で大きな注目を集めている。我々の会ではこの芸術活動に強い関心を持ち、会報でも記事として何回かとり上げた。特に、この地域にあって昨年東日本大震災で全壊したオーストラリアハウスの再建にいち早く貧者の一灯を捧げて以来、そこでの関係者との絆が深まった。

7月末の開会式には当会常務理事の鮫島宗明氏と私が出席し、無事に開催できたことにお祝いの意を表した。開会式のあとオーストラリアハウスを訪れ、そこですでに活動をはじめている若い芸術家たちと交流した。彼等は再建された小さいながらもユニークな形状をもつオーストラリアハウスに寝泊り、自炊しながら生活しつつ創作活動を行っている。ハウスの内装はアボリジニの血を引くアーティストのブルック・アンドリュウ氏のデザインで、アボリジニ民族の典型的なパターンを壁面に用いるなど、これもまたユニークで美しい。

このオーストラリアハウスでは、9月までの芸術祭期間中に次々とオーストラリアの若いアーティストが滞在し、作品を創り上げ展示することになる。そして、芸術祭終了後には日

豪芸術交流の拠点としてその機能を発展させたいとのこと。我々の会としてはこのような交流活動を何とか支援していきたいと考える。

最後に、この会報をご覧の人たちに強く勧めたい。今年の夏はこの越後妻有アートトリエンナーレを訪れ、そこでユニークな芸術作品をたっぷりと観賞していただきたい。地域内には日本三大薬湯のひとつ松の山温泉があり、廃校になった建物を宿泊所にしたミニ簡易ホテルもあるので、どうぞ泊りがけでお出かけ下さい。このトリエンナーレについてはホームページを見ると詳しく知ることができます。

(<http://www.echigo-tsumari.jp>)

オーストラリア・ハウスの再建

日豪交流の拠点。芸術祭開催年以外もレジデンスプログラムを実施予定

「小さくて、丈夫で、安い」をコンセプトに安藤忠雄氏を審査委員長に迎え国際設計コンペを実施。150点を超える公募の中から、シドニーを拠点に活動するアンドリュー・バンズ・アーキテクトの案が採用された。



助成： 豪日交流基金、社団法人海外と文化を交流する会

設置作品「ディラン・インラングー山の家」 ブルック・アンドリュウ



高3m×幅4mの壁面(2面)を使った作品。

壁面①(内側)アボリジニの伝統的な紋様および浦田集落から収集した言葉をネオンで点滅させる。
壁面②(外側)内側が鏡張りで、その上に浦田集落から収集した古い写真を転写する。

壁面②は可動式で、壁面①との間につくる空間に内包される形で鑑賞してもらう。

■暑かったけど、参加してよかった。

—オーストラリアハウスと大地の芸術祭のオープニング参加報告—

鮫島宗明 (社)海外と文化を交流する会常務理事

7月28、29日の両日、越後妻有を訪れ、オーストラリアハウスと大地の芸術祭のオープニングに参加した。29日には大谷会長も妻有入りしたが、私は28日に妻有に入りオーストラリア大使館関係者のために用意された「作品見学ツアー」と、オーストラリアハウス開設記念バーベキューパーティーに参加した。

越後妻有は十日町市と津南町からなるが、今でも合併前の6市町村名が地域名称として使われており、それぞれ、北から川西地区、松代（まつだい）地区、十日町地区、松之山地区、中里地区、津南地区と呼ばれ、エリア分けされている。東京の人にとっては、魚沼丘陵の西に位置する十日町盆地を中心とする地域で、日本有数の豪雪地帯、コメどころとしては「中魚沼」と称され、独特のうまみと甘みを含む米が採れる地域といった方が親しみ深いかもしれない。

夏の妻有は初めてだが、スキー場もたくさんあるし、何しろ北陸なのだから、少しは涼しいかと思って甘く見たのが大きな間違い、盆地特有の湿った大気に、夏の太陽はじりじりと容赦なく照りつけ、帽子もなければ魔法瓶も持参しないのんきな旅人にとっては、了見の甘さを思い知らされた見学ツアーだった。

旅程は、28日朝に、十日町駅のほくほく線西口集合、10時から大使館の仕立てたバスでアート作品の見学ツアーに出発、東京23区より広い地域に360の作品が点在しているわけだが、車窓から鑑賞できる野外作品以外の室内展示作品は、大部分が空き古民家や、廃校を活かしたものだ。

十日町地区からコースが採られ、まず、旧名ヶ山小学校の校舎を活かした「アジア写真映像館」を鑑賞。内外の若手写真家の思いがこもる多くの作品が展示されていた。続いて、旧真田小学校の「絵本と木の実の美術館」。最後の卒業生となった3人の子供達が枝のアートとして抽象化され、思いを残しつつ世界に羽ばたく様が、校舎中に展開されていた。

そこから中里地区に移動、JR飯山線の越後田沢駅脇に作られた「未来への航海／水から誕生した心の杖」を鑑賞、駅と調和した細長い木造建屋に無数の種子に覆われた昔懐かしい手漕ぎの漁船、奥の部屋には、湧き出る水をたたえた水槽と空に舞い上がるかのような無数の杖が配置されていた。感じるころは、人それぞれなのだろうが、2時間に一度この作品脇を通過する飯山線の列車も作品の一部ととらえてほしい、との製作者からのコメントも添えられていた。

昼食休憩後、松之山地区に移動、古民家の「上鰯池名画館」着、気楽に楽しめるので人気が高いらしい。世界の名作絵画に登場する場面を鰯池集落の現実の風景から探し出してカメラで撮影、画像中の人物を集落の人たちが、それらしく扮装して演ずるというユーモラスな試み。ゴッホやフェルメール、ミレーにダヴィンチといった誰でも知っている巨匠たちの作品が妻有化してしまうという不思議な作品。最後の晚餐は、公民館の広間で12

人の男たちが横一列に並んで「うな重」を食している場面だが、キリスト役の人は何となく高潔ながら寂しげな雰囲気だし、ユダ役の人は少し横を向いて十分怪しげな雰囲気を醸し出している。傑作は、ムンクの「叫び」で、集落内の布川大橋を借景としたもの。深い谷にかかり、先はトンネルに続く橋だが、そのうえで頬を抱えるおじさんは、どこことなくソノマンマ東似だが、ぴったりの役どころで、その後、モデル役の方は集落内では「ムンク」と呼ばれているし、知らない観光客から声をかけられることも多くなったそうである。

松之山地区では、続いて旧東山小学校体育館を展示場とした、著名なフランスの芸術家クリスチャン・ボルタンスキーの作品「最後の教室」、大きな古民家を宿泊施設兼芸術作品として作り上げた「夢の家」などを訪れた。「夢の家」は弱い間接照明、渋い色調の各室の中央に棺桶様のベッドがしつらえてあり、そこで眠りにつけば、いかにも夢を見そう（悪夢かもしれないが）な気にさせられる。宿泊者は、目覚めの朝、見た夢を書き記すこととなっており、夢を綴るところまで作品意図とされているが、すでに2000以上もの夢が綴られており、そこから厳選した100の夢が「夢の本」として、書籍化されている。

夢の家をはじめとする古民家を活用した作品は3月12日の、東北誘発地震で多くの被害を出し、今年の公開までの復旧が危ぶまれたが、作品を抱える集落の方々が、労を惜しまず協力し、見事な修復がなされたと聞く。地震被害で打ちひしがれた湯本地区でも、地元の方々は「夢の家」の再建を合言葉として、あるいは復興のシンボルとして修復に取り組み、その取り組みが団結力を培ったらしい。

復興のシンボルと位置付けられ、地区の方々が一致団結して復興に取り組んだ例としては、オーストラリアハウスも例外ではない。28日、午後4時から始まったオーストラリアハウス再建バーベキューパーティーでは、浦田小学校在校生全員（9名）による歓迎の太鼓が打ち鳴らされ、地区長をはじめとする多くの住民が、市の職員や、大使館関係者とともに参加し、総勢200名を超える賑わいを呈した。154点の公募作の中からアンドリュース・バーンズの作品が選ばれた。安くて、小さくて、頑丈で、日豪文化融合のシンボルとなりうるのと、難しい条件を突破した作品だけあって、周囲の自然ともよくなじみ、地区の防災拠点としての堅牢さも兼ね備えている。

開会のスピーチでは、オーストラリア大使のブルース・ミラー閣下が、通訳抜きで流暢な日本語で、被災後わずか16か月で再建にこぎつけた関係者の努力に深い感謝と敬意を表明した。また、十日町市長は、オーストラリアハウスが、アトリエ・エンナーレの中核的作品であるとともに、十日町市の活性化にとって、如何に不可欠な施設であるかを力説した。余談ながら、今回の大震災は、悲しい出来事を数多く生んだが、唯一の救いとしては、被災地区の首長さんたちが政治の原点に立ち還り、大きく成長したことだと言われている。確かに、市長さんのご挨拶は、永田町の政治家たちに聞かせてあげたいほど心のこもった内容だった。

バーベキューの肉はもちろん豪州自慢のOZビーフ。メインテーブルには、市長さん、市の幹部、地区住民代表と共に、ミラー大使、前大使のマレー・マクレーンさん（現、豪日交流協会会長）、政務担当のリチャード・アンドリュース公使らが並んだが、その隣の席に「海外と文化を交流する会 大谷会長」の席が用意されていたことに驚いた。感激し

つつ、隣席に着いたことを幸い、アンドリュース公使とは FTA、TPP 締結促進策について、かなり突っ込んだ話し合いが出来た（公使も流暢な日本語を話す）。

29 日は、トリエンナーレの開会式が中核施設の越後妻有現代美術館「キナーレ」で執り行われ、その後、合流した大谷会長とともに、じっくりとオーストラリアハウスを再見した。

今回のアテンドは、子へび隊（地域活性化やアートトリエンナーレに協力するボランティアグループ）に所属し、その能力を評価されオーストラリア大使館に就職した徳仁美さんが担当してくれたが、彼女は当然のことながら、地元の方々ともほとんど顔見知りということもあり、オーストラリアハウスの再建には重い責任を課せられたようである。パーティーの席で「今日の再建に間に合うかどうか、当初は全く見通しはありませんでした」と、心からほっとしたように述懐していたが、多くのゲストの間を飛び回る彼女の背には終始、玉の汗が光っていた。

お世話になりました。有難うございました。

特集 2 : ハミルトン現代日本画展

■ハミルトンでの日本画展

大谷俊介（社）海外と文化を交流する会 会長

世界地図の中でハミルトンという名前を探すと 10 数件の場所が現れる。それは街であったり島であったりする。オーストラリア内に限って調べると、まずは東海岸のグレート・バリア・リーフの中のハミルトン・リゾート・アイランドが出てくる。表題のハミルトンという街を探し当てるには少し詳しい地図情報が必要だ。

今年日本画展が開かれたハミルトンは、ビクトリア州にあり州都メルボルンから西へ 300Km 行ったところにあり、通称グランピアンズと呼ばれる広大な草原地帯の中心に位置する人口 9 千人ぐらいの小さい街である。この地帯は数千年前の火山活動により隆起した溶岩と火山灰混じりの大草原で四方八方地平線が見渡せる。そして、この地に英国やドイツから沢山の移民が入植し、無法の中先住民のアボリジニを激しいバトルの末駆逐し羊毛業を育てた。こうしてハミルトンは街の規模は小さいながらも「世界一の羊毛都市」と自称するまでに栄えたのだそうだ。

今ではかつての盛栄都市の雰囲気は薄れているが、しっとりと落ち着きに満ちた商店街には大きな羊毛織物を扱っている店も多く、何よりも街の規模から想像しにくい立派な美術館があることに驚く。これも豊かであった街の象徴であり名残りなのであろう。

このハミルトン美術館は今年で創立 50 周年を迎える。それを記念する事業として、我々

の会がオーストラリアに寄贈した現代日本画 25 点の展覧会が 2012 年 5 月下旬から 7 月はじめまで開かれることになったのだ。会の主催は当美術館とそれを支えるビクトリア州政府芸術省アーツ・ビクトリアであり、当会はそれに以下のように協力することになった。

1. 日本画展のカタログ製作のお手伝い。オーストラリアにおける日本美術紹介にとって有力パトロンであるポーリン・ガンデル夫人（ガンデル家は当地のユダヤ系財閥）のご好意で、大袈裟に言えば後世に残せるような充実したカタログを作りたいとの希望が寄せられた。そのため、当会は日本画に関してまったくの素人集団であるが、短期集中して日本画を学び、先方からの依頼によって寄贈日本画 25 点の画家 25 人の簡略な邦文と英文による紹介記事を作り、それらをカタログ（展覧会も同様）の日本画の脇に載せる。加えてこれも先方の希望に従いカタログの冒頭に現当会会長である私の挨拶と、当会の紹介および日本画寄贈の経緯などについて記述を載せることにした。このうち、日本画家の紹介を行う作業は我々にとって至難のわざで、私などは国会図書館に何回も通い美術年鑑の類に目を通して見たが、どれもが精しすぎて、それも流派や系譜そして受賞歴などの説明が多く、それを簡潔にまとめるのは絶望的に無理であると想われた。それでも何とか粗く仕上げてはみたが、それを読み返すととても人目に見せる代物ではない。そこで美術通信を編集している旧友に相談したところ、この件では山種美術館の助けを借りるのが一番良いと言われた。そして、今となっては汗顔の至りであるが、今年の春先、当館での「桜さくら展」に足を運び、ぶしつけにもぶっつけで学芸部長の高橋美奈子さんに面会し、画家紹介の記述作りに関してのご指導をお願いしたのだ。彼女は当方のほとんど困った様子を見透したのであろう、心良く協力を約束して下さった。これはまったくありがたいことで深く感謝したい。

そのあと何回も当館に足を運び、山崎妙子館長にもお目にかかり、こちらの勝手な片想いではあるが、この強い絆ができたことを心強く思い作業を進めることができた。そして、遂に高橋女史のお力を借りてこの画家たちの紹介記事を作り上げた。なお、この完成に当っては、オーストラリア在住で日本工芸史の専門家である日本美術の紹介者としても有力な味岡千晶さんにもありがたいことに深くご協力をいただいた。

今回のこの特集号では、上に述べたカタログ冒頭の私の挨拶文をお目にかけることにする。この展覧会開催の経緯などを知ることができるであろう。また、カタログに掲載されている味岡千晶女史による日本画の歴史、近代日本画の誕生およびいくつかの展示日本画の説明などを含むオリジナルな文章、そして、25 人画伯のプロフィール紹介記事は残念ながら紙面の都合により割愛する。

今年 10 月 20 日（土）にこの日本画展参加の報告会が開かれる予定なので、その時にカタログ全体をお見せすることにした。

2. 日本画展の開会式への出席報告。2012 年 5 月 29 日にジョージ・ギッシュ常務理事が 当会を代表して出席した。そして、この機会に現地のさまざまな人たちと交流した。

その報告は後出。

3. 日本画に関するシンポジウム。2012 年 6 月 15 日に開かれたシンポジウムに出席するため当会から創画会の北條正庸画伯（多摩美大教授）と中野真逸郎常務理事と私が渡豪した。シンポジウムの内容は以下。

- 1) 挨拶、ハミルトン美術館館長、ダニエル・マクオワン氏
- 2) 日本画寄贈の経緯、当会の歴史と活動、オーストラリアとの文化交流について、大谷俊介

- 3) 日本画の文化的特徴、画材の説明、日本画製作の実演、北條正庸画伯、通訳：味岡千晶女史
- 4) 質疑応答

これらのうち、主体は北條画伯による実演付きの日本画に関する講演で、その様子はこの特集号の中野常務理事の記事に詳しく報告されている。

この北條画伯のご講演は、その内容が充実していることに加え、味岡女史の見事な通訳により聴衆に多大な感銘を与えることができた。中でも、マクオワン館長の自宅の庭から取り寄せたオリーブの木の枝を即興で日本画手法（葉裏の白い部分を銀箔を使って表現するなど）を用いて色紙上に写生し、美しい一幅の絵に仕上げた技の実演は皆を興奮の渦に巻き込んだ。

なお、マクオワン氏はハミルトン美術館の4代目の館長で在職25年を迎え街の名士である。我々3人の滞在中、終始暖かく世話を下さった。週末には自らの運転で初冬のグランピアンズ高原への遠足に連れて行って下さった。美しい花をつけているユーカリやアカシアの群生林が印象的だった。彼のおもてなしに深く感謝したい。

最後に、ハミルトンでのシンポジウムのあとメルボルンの日本領事館を訪問した。そこに所属する広報文化センター所長の江草恵子さんはシンポジウムにも参加し、我々とオーストラリアの人たちとの交流の仲立ちに貢献して下さいました。そしてメルボルンでは、首席領事の千葉広久氏と5年前の日本画展の時に大変お世話になり親しくお付き合いいただいた外山久美子さんと一緒に日本料理店で楽しく会食する機会を作って下さった。

ご馳走さまでした。

今回の我々のオーストラリア訪問の旅の様子は来る10月20日（土）の報告会で詳しくお話しすることになるが、ここではその楽しい旅の一部を切り取ったスナップ写真のいくつかをお見せする。グランピアンズはワインの名産地でもあり、それが旅の楽しさに一層華を添えた。

ハミルトン日本画展のスナップ写真の説明

1.日本画展会場の看板の前に立つ北條正庸画伯



2.会場内で中野常務理事、マクオワン館長、江草女史（日本領事館）



3.シンポジウムでの挨拶、大谷会長と
マクオワン館長



4.北條画伯によるオリーブの枝の写生と
味岡女史の通訳説明



5.シンポジウム終了後に聴衆が北條画伯の囲りに参集



日本画展カタログに掲載された当会からの挨拶

Introduction

The International Culture Appreciation and Interchange Society, Inc. (the ICAIS for short) is extremely delighted to be able to hold again a Contemporary Nihonga Art Exhibit in Hamilton to celebrate the 50th Anniversary of the Hamilton Art Gallery.

Japan and Australia are now very important and intimate partners. We live thousands of kilometers apart; one is in the northern hemisphere and the other in the southern hemisphere, but both lie in the Pacific Ocean, linked at 140 degrees east longitude.

From the historical point of view, since the nineteenth century, many Japanese settlers in Australia contributed to the development of the relationship through the pearl and sugarcane industries. On the other-hand, many Australians came to Japan and lived in the foreign settlement near the then newly opened Yokohama port in the same era, and developed the trade business with imports of Australian wool.

Our bilateral relations in economics expanded rapidly, but were interrupted for a while by the sad Second World War. After the War, Japan established diplomatic relations with Australia, and the subsequent rapid economic expansion led to a rapid growth in bilateral trade. In addition, in order to develop mutual understanding between the people of Japan and Australia, the Basic Treaty of Friendship and Cooperation was concluded in 1976, which triggered the promotion of cultural exchanges with the increase of people to people links.

As a pioneer in this movement, Lady Asa Matsuoka, who was the founder of the ICAIS, believed always in deepening the trust between our two nations in ways that go beyond trade and economics by emphasizing the importance of exchanges of the heart through cultural interchange, which formed the philosophy of our Society.

As a first step, she drew up plans to introduce the heart of Japan as expressed through the representative Japanese Art of Nihonga. In order to carry out this cultural interchange, she appealed to many of the then current Nihonga masters including several highly decorated artists with Orders of Cultural Merit. Finally, there were 25 who responded by agreeing to create original Nihonga works for this project.

Five years later, in 1977, when all the works were completed, it was arranged for the 25 contemporary Nihonga works to be exhibited at the National Gallery of Victoria in Melbourne. At the end of that exhibit, instead of returning the collection to Japan, the 25 Nihonga works were donated to the people of Australia, so that they could come to know

the heart of Japanese beauty by always being able to come into contact with these Nihonga works of high artistic merit.

This is really the most impressive and remarkable event on the initial stage of the history of Cultural Interchange between Japan and Australia.

In the opening ceremony of the Exhibition, the then Premier R. J. Hamer of Victoria State attended the ceremony with high words of appreciation for the effort of our Society (the ICAIS) saying, "The Exhibition is the first gesture of goodwill to the people of Australia by the ICAIS. It is more worthy than a peace and friendship treaty." The realization of this project, a five-year dream of Asa Matsuoka, remains as a bright page on the history of our Society which still gives us pride.

Long afterwards, during the 2006 Japan-Australia Year of Exchange, which was held to commemorate the 30th anniversary of the signing of the 1976 Basic Treaty of Friendship and Cooperation, we were happy to have a similar Exhibition, organized by Arts Victoria, to display the 25 Nihonga works at the Queen's Hall of the Victoria State Parliament House and at the Royal Melbourne Institute of Technology Gallery, which also received an extremely favorable notice in this Special Year of Exchange.

Furthermore, it is now our great pleasure to be able to participate in holding once again the Nihonga Exhibition to display the entire collection of 25 works together at the same time and place in Hamilton.

We believe that when people talk to each other in front of a beautiful Nihonga art work, it will help Australians better understand Japan. And now, as we turn a new page in our common history, it is our firm hope that this occasion will serve to further foster the cultural interchange and deepen the friendship between the people of our two nations.

Shunsuke Ohtani, Dr. of Sci.

President, International Culture Appreciation
and Interchange Society, Inc.

Professor Emeritus, University of Electro-Communications

(以下邦文)

ご挨拶

海外と文化を交流する会は、2012年ハミルトン美術館の創立50周年の記念行事として、現代日本画展が再び開催されることを大変うれしく思います。

日本とオーストラリアは、遠く離れてはいますが、共に太平洋の中にあり東経140度の線でつながる重要かつ親密なパートナーです。

歴史的に見ると、19世紀から多くの日本人が真珠取りやさとうきび栽培のため、オーストラリアに入植し交流を深めました。一方、オーストラリアからは、横浜開港後の居留地に多数の貿易商人が去来し、オーストラリアの羊毛の日本への輸出を広めました。そして、日豪間の経済交流は徐々に勢いを増していきましたが、第2次世界大戦の悲しい出来事によりその関係は中断します。

大戦後には日豪間の国交は回復し、再び活発に貿易が行われるようになりました。その中で1976年に両国民に相互理解を高める目的をもつ「日本友好協力基本条約」が締結され、それを契機として文化と人的交流が著しく発展拡大したのです。

私たちの会の創立者である松岡朝女史は、この流れの中で先駆けて、両国の信頼を高めるためには貿易関係以外に文化を通じた人と人との心の交流が重要であると考えました。これは当会の理念を形成することになります。そして、その一歩として、日本の心を表現する芸術である日本画を紹介することを企画したのです。彼女は献身的な努力を続け、文化勲章受章者を多く含む当時の日本画の巨匠25人にこの文化交流の趣旨を理解してもらい、それぞれに1点ずつの絵を描いてもらうことに成功しました。こうして5年の歳月をかけて完成した日本が誇る現代日本画25点を1977年にビクトリア国立美術館に展示することができました。

この展覧会のあと、いつまでもこの香り高い芸術作品を見て日本の美しい心を知ってもらいたいと、これら25点の日本画を日本に持ち帰らずにオーストラリア国民に寄贈したのです。これは日豪交流の歴史に残る画期的な出来事として強い印象を与えました。

1977年9月の展覧会の開会式典で、当時のビクトリア州のヘイマー首相は「この展覧会は海外と文化を交流する会のオーストラリア国民に向けた最初の親善表現である。これは平和友好条約を結ぶ以上の価値がある」と挨拶したのです。

松岡朝女史の夢であった5年をかけたこのプロジェクトの成功は、私たちの会にとってその歴史に華やかな1頁を飾るとても誇らしい出来事でした。その後、1976年日豪友好協力条約の署名30周年となる2006年は日豪交流年に指定され、その末尾を飾る行事として年末にメルボルンのビクトリア州議会議事堂であるクイーンズホールと市内の大学のギャラリーで、再びこの全25点の日本画の展覧会が開かれ大好評でした。

さらに今年、ハミルトン美術館で同様の展覧会が開かれることは私たちにとって大変うれしいことです。お互い一幅の美しい絵の前で印象を述べ合うことでオーストラリアの人たちは日本を一層理解することでしょう。この機会に、今後ますます両国の文化交流と友情が深まることを期待します。

2012年4月

大谷俊介

海外と文化を交流する会 会長

■オーストラリア訪問報告 英文および邦文

Report of Visit to Australia for the Opening of the Nihonga Exhibition at Hamilton Art Gallery

George W. Gish, Jr.
ICAIS Executive Director

After arrival in Melbourne on May 28, 2012, there was time to pay a visit to the Japanese Consulate-General offices in the city center. Fortunately, the Consul-General, Hidenobu Sobashima (側島秀展) was available in the afternoon, along with the Deputy Consul-General, Hirohisa Chiba (千葉広久) and the Director of the Japan Information and Cultural Centre, Keiko Egusa (江草恵子).

They were all new to the consulate staff since our last visit in 2010, so it provided a good chance to review the history of our Society (ICAIS) in connection with the gift of the 25 contemporary Nihonga works in 1977, and share information on the 35-year journey during which there was a long period of not knowing what had happened to the works after the original events took place. Fortunately, we could report on the positive cultural exchanges that have taken place since the major exhibition at Queen's Hall in connection with the 2006 Australia-Japan Year of Exchange (YOE), commemorating the 30th anniversary of the signing of the 1976 Basic Treaty of Friendship and Cooperation between Australia and Japan, followed by the Memorandum of Understanding (MoU) signed with Arts Victoria in 2010.

In keeping with the MoU, all 25 works are now in the custodial care of the National Gallery of Victoria (NGV) with occasional hangings of some of the works in connection with other exhibits on related themes.

The reason for our visit this year was to attend the opening of the Nihonga: Japanese Painting Exhibition held in Hamilton to commemorate the 50th anniversary of the Hamilton Art Gallery. After spending the afternoon at the Japan Consulate, I went to the Essendon Airport for the flight to Hamilton, where I met Dr. Chiaki Ajioka (味岡千晶) who had assisted with the publication of the new catalogue of all 25 works, and would serve as the translator for the Nihonga Workshop and Symposium in June. Upon arrival at the small local airport, we were met by Daniel McOwan, Director of Hamilton Art Gallery, who had made all the arrangements for the exhibition, including the catalogue and related events.

Our dinner that evening had been prepared at the spacious home of Leslie Slorach, a long-time friend of Danny and supporter of the Hamilton Art Gallery. Her hospitality during the visit was much appreciated and provided

a place for rest and making new friends.

After a leisurely morning, we were given a complete tour of the Art Gallery, climaxing with the display of the 25 Nihonga works in the upper gallery. The museum staff had done an excellent job of placing the works at eye level in an attractive layout, making it possible to enjoy each work in its own setting. How exciting it was to take the completed catalogue in hand and see the excellent content and beautiful reproductions of all 25 works.

We all returned to the gallery at 6:00 pm for the official opening ceremonies, where we were greeted by the mayor of Hamilton, Robert T. Penny and other local officials and gallery supporters. It was good to see the representative from Arts Victoria, Michael Nation, who had been the escort for Lady Asa Matsuoka during the original presentation ceremonies some 35 years ago. There were also two curators of Asian art from the NGV, Wayne Crothers and Juliette Park, whom we had met in 2010.

The highlight of the evening was the official opening with greetings by Deputy Consul-General, Mr. Chiba, and the exhibition sponsor, Pauline Gandel, who has provided major philanthropic support for the arts in Australia. The Hamilton Nihonga Exhibition, along with the publishing of the attractive catalogue, would not have been possible without the sponsorship of Mrs. Gandel. Her friendship with the former Japanese Consul-General in Melbourne, Susumu Hasegawa, has deepened the cultural ties between Japan and Australia, as evidenced by her deep commitment to Japanese culture, including serving as the President of the Urasenke Japan Tea School in Victoria and her collection of rare Japanese lacquer ware.

During my remarks as representative of ICAIS, I shared the greetings of Yuko Matsuoka and Prof. Ohtani, which were well received. In closing, I referred to our 35-year relationship with Australia, which began with the original gift of the 25 Nihonga works. And now we are in the process of falling in love again, after overcoming various difficulties and misunderstandings over the years. My conclusion was that, "Each time we have the opportunity to encounter the beauty of these great works, it provides a new opportunity to deepen our love affair between the dynamic cultures of Japan and Australia."

After the ceremonies, a dinner reception was held at the home of Mrs. Slorach attended by Pauline and John Gandel, Hirohisa Chiba, Jane McDonald (President of Friends of Hamilton Art Gallery) and her husband Hugh McDonald. Others included Dr. Chiaki Ajioka, Lesley Kehoe (prominent dealer in Japanese art and close colleague of Pauline Gandel), and Danny McOwan. For me, this dinner was one of the highlights of the visit, which provided a unique opportunity to share mutual concerns for the future of

cultural exchanges between Japan and Australia.

On May 30, the final day in Hamilton, I enjoyed another visit to the gallery to spend more time with the works. There was also time to share information on the art of Nihonga with the young gallery staff, who showed a deep interest in learning more about this distinctive form of Japanese art and were looking forward to the Workshop by Prof. Hojo. Many fond memories of Hamilton were taken with me as we flew on the small propeller airplane back to Melbourne.

The next day turned out to be full of wonderful encounters; first of all at Arts Victoria, where I was greeted by the Director, Penny Hutchinson, followed by an intensive time with Michael Nation in which we confirmed our long relationship with Arts Victoria and NGV, while taking a look at future possibilities for deepening our cultural exchanges with the upcoming generations in both nations. He was enthusiastic about the possibility of Nihonga exhibitions in the other major regional galleries after the success in Hamilton. Under the leadership of Tony Ellwood, who will become the new NGV Director from August, Michael was certain that the Nihonga collection would gain new prominence under the government's emphasis on "Australia in the Asia Century."

After a short walk to NGV, it was good to have lunch with the two curators related to the Japan collection, Wayne Crothers and Juliette Park, who were greatly impressed by the Hamilton exhibition. They walked me through the current Japanese art section, which followed the historical theme of Buddhist influence. They confirmed that the new Japanese gallery, as part of the Asia section in the NGV International Museum, was now under construction, and should be finished sometime in September of 2012.

From 3:00 pm, I joined the Deputy Consul-General, Mr. Chiba, for a visit to the home of Pauline and John Gandel in suburban Melbourne. We were guided through the private Japan lacquer museum of Mrs. Gandel who was assisted by her longtime associate, Lesley Kehoe, in explaining the significance of each rare piece in the collection. John joined us for tea and a special time of sharing our mutual vision of deepening the cultural ties and understanding between Australia and Japan. The Gandels mentioned that on their recent visit to Japan they had met with their good friend, the former Japan Consul-General in Melbourne, Susumu Hasegawa, who is now serving as Japan's Ambassador to the Republic of Iraq, but still continues to show concern for the treatment of the 25 Nihonga works at NGV.

On the evening of May 31, at the invitation of Wayne Crothers, I attended the opening reception of the Napoleon Exhibition at NGV International,

currently running until the 7th of October. After all the speeches, I took the opportunity to exchange greetings with the NGV Director, Gerard Vaughan, who will be stepping down from his position in July. He was aware of the gift of the 25 Nihonga works from our Society, and confirmed that the new Japan Gallery would be completed with a target date for the opening on September 10~11, 2012. I expressed the appreciation of ICAIS for his role in making this new gallery section possible.

During the reception I also talked with Jason Yeap, one of the NGV Trustees who has been influential in the construction of the new Asia gallery and is concerned about the treatment of the 25 Nihonga at NGV. Late in the evening there was another chance to share ideas with Wayne Crothers, including the possibility of more local exhibitions at other important regional galleries.

My final day in Melbourne began with a follow-up report to Mr. Chiba at the Japan Consulate-General office. It was also good to have time to talk with Kumiko Toyama, a local staff member of the consulate who has always been helpful in making arrangements for our past visits to Melbourne.

After taking the courtesy Tourist Bus to have a farewell look at the city, followed by lunch at the “World” restaurant on the South Bank, I picked up my luggage at the hotel and took the Sky Bus to the airport for the return flight to Japan via Sydney. Hopefully this short visit helped to smooth the way for the subsequent journey by our three Society members who would present the Nihonga Workshop and Symposium in Hamilton on June 15, and make a small contribution to widening the path for the next 35 years of cultural interchange with Australia.

■オーストラリア訪問報告

(上記の和訳)

ハミルトン・アート・ギャラリー日本画展開会式に出席

ジョージ・W・ギッシュ Jr. (社)海外と文化を交流する会常務理事

私は2012年5月28日、メルボルンに到着し、シテイセンターにある日本総領事館を訪問した。幸いにもその日の午後、側島秀展総領事、千葉広久主席領事、江草恵子日本文化センター理事に会うことができた。この方たちは2010年の私達のオーストラリア訪問以後に就任されたので、1977年の我が「海外と文化を交流する会」ICAISの日本画展寄贈の歴史と、最初の展覧会の後その作品が行先不明になって35年間探していたことを話すよい機会となった。幸いなことに、1976年の日豪友好基本条約30周年を記念した2006日豪交換年Year of Exchange (YOE)、続く2010年、Arts Victoriaで調印された「寄贈日本画の管理、展示などについての双方の理解に関する覚書」Memorandum of Understanding (MoUと略す)との関係でQueen's Hallで開かれた展覧会以後のことに関しては肯定的な文化交流の報告

ができた。

MoU を遵守するために、全 25 作品は現在 National Gallery of Victoria (NGV) の管理下にあり、そのうちの何点かは、ほかの同じテーマの展覧会の折などに展示されている。

私達の今年の訪問は、ハミルトン・アート・ギャラリー50周年記念にハミルトンで開催される日本画展の開会式に出席するためである。日本総領事館で過ごした後、私はハミルトンに向かうために Essendon 空港に行き、そこで Dr.味岡千晶に会った。味岡氏は全 25 作品のカタログ発行に協力し、6月の日本画ワークショップ シンポジウムの通訳をしてくれる人である。ハミルトンの小さな空港では、カタログなども含め今回の展覧会関連の仕事を担当してくれた Daniel McOwan 氏が出迎えてくれた。

その日のディナーは、Danny の長年の友人で、ハミルトン・アート・ギャラリーの支援者である、Leslie Slorach 氏の広大な邸宅で用意されていた。この訪問の間中の彼女の御尽力は大変なもので、私に休息と新しい友人を作る機会を与えてくれた。

ゆっくりした朝を迎えたあと、私達はアート・ギャラリーをくまなく見学した。クライマックスは2階の 25 作品の展示である。美術館のスタッフは魅力的な配置で視線の位置に作品を展示し、それぞれの作品を楽しめるようにしてくれた。完璧なカタログを手元に美しい 25 点の日本画を見ることはすばらしいにちがいない。

私達は6時に公式な開会式に出席するためにギャラリーにもどり、そこでハミルトン市長の Robert T. Penny 氏や関係者、ギャラリーの支援者達に会った。約 35 年前、故松岡朝女史が最初に訪問した際にエスコートしてくれた Arts Victoria 代表の Michael Nation 氏に会えたことはうれしかった。また、NGV のアジアンアートの二人の部長、2010 年にも会った Wayne Crothers 氏と Juliette Park 氏も来ていた。

その夜のハイライトは千葉主席領事のあいさつと、この展覧会のスポンサーで、オーストラリア美術の最大の慈善基金支援者の Pauline Gandel 氏のあいさつだった。彼女の支援がなければ、ハミルトンの日本画展覧会も魅力的なカタログの発行もあり得なかつただろう。

この女性は長谷川進前メルボルン総領事との友情により、日本とオーストラリアの文化的きずなを深めてきたという。彼女の日本文化への傾倒ぶりは、ヴィクトリア州での裏千家流会長をしたり、日本の漆器のコレクションをしたりしていることでもわかる。

私の ICAIS 代表としてのあいさつの時、松岡裕子氏と大谷教授からの祝辞を紹介し、出席者に喜んでいただいた。終わりに、日本画 25 点寄贈から始まった 35 年間のオーストラリアとの関係にふれた。そして今、長年のさまざまな困難や誤解を乗り越えて、私達は再び熱い恋愛関係の段階にある。結論として、「これらの大作品の美にふれる機会があるたびに、日本とオーストラリアのダイナミックな文化に対する私達の愛情を深める新しい機会がふえる」と思う。

式の後、Mrs. Slorach の家で歓迎ディナーが開かれ、Gandel 夫妻、千葉広久氏、ハミル

トン・アート・ギャラリー友の会会長の Jane McDonald とご主人の Hugh McDonald が出席した。ほかにも味岡千晶博士、Pauline Gandel の親しい仲間で日本美術商の Lesley Kehoe、Danny McOwan 氏がいた。私にとってこのデイナーは今回の訪問の重要な場面の一つで、日豪間の文化交流の将来についてお互いの関心を話し合う良い機会だった。

ハミルトンでの最終日の 5 月 30 日、私はもう一度ギャラリーに行き、この日本画をゆっくり鑑賞した。これはまた、若いギャラリーのスタッフと日本画のことを話し合うひとときとなった。彼は日本画の独特の様式をもっと知りたいと深い関心を示し、北條教授のワークショップを楽しみにしていた。

メルボルンに向かう小さなプロペラ機に乗っている間中、わたしはハミルトンでのたくさんの温かい思い出につつまれていた。

その翌日にも素晴らしい出会いがあった。第一に Arts Victoria で、Penny Hutchinson 理事の出迎えを受け、つづいて Michael Nation 氏と濃密な時を持たた。私達は Arts Victoria と NGV での長い関係を確認しあい、さらに両国のこれからの世代へ文化交流を深める可能性を見せてきたと話した。彼はハミルトンでの日本画展成功後、ほかの地域のギャラリーで日本画展をやるのが可能であると熱心に語った。8 月から新しく NGV 理事になる Tony Ellwood の指導により、日本画コレクションは政府の「アジア世紀のオーストラリア」強調で新しく脚光を浴びると確信していると言った。

NGV まで少し歩いた後、日本絵画コレクション関係の二人の部長 Wayne Crothers 氏と Juliette Park 氏に会ってランチできてよかった。二人とも日本画展に大変感動していた。二人は私をその時展示中の、ジャパニーズ・アート部門に連れて行ってくれた。それは、仏教の影響という歴史的テーマに従っていた。彼等は新しいジャパン・ギャラリーが NGV International のアジア部門の一部として現在建築中で、2012 年 9 月には完成すると確約してくれた。

3時から私は千葉首席領事とともにメルボルン郊外の Pauline & John Gandel 夫妻の家を訪ねた。そこで、長年 Mrs. Gandel の協力者である Lesley Kehoe 氏に貴重なコレクションを一つ一つ説明を受けながら Mrs. Gandel のプライベートな日本漆器ミュージアムを拝見した。John もお茶に加わり、日豪文化理解を深める相互の考えを分かち合う特別なひとときを持った。Gandel 夫妻はせんだって日本を訪問した際、長谷川前メルボルン総領事に会ったと言った。長谷川氏は現在イラク共和国大使だが、NGV の日本画 25 点の取り扱いには依然として関心を持ち続けてくれている。

5 月 31 日の夜、私は Wane Crothers 氏の招待で NGV International の 10 月 7 日まで開催されているナポレオン展の開会式に出席した。いくつかのスピーチが終わってから、7 月にやめることになっている Gerard Vaughan MG V 理事と挨拶を交わした。彼は私達の会の日本画 25 点寄贈をよく知っていて、新しいジャパン・ギャラリーが 2012 年 10 月から 11 月オープンという目標期日には完成されると請け合ってくれた。私は ICAIS を代表して、新しいギャラリー部門を作ってくれた彼の尽力に感謝を表した。

このレセプションで、私は NGV 評議員として、新しいアジア・ギャラリー建設に大きく貢献し、NGV の日本画 25 点についても関心を示してくれていた Jason Yerp 氏とも話すことができた。その後もう一度 Wayne Crothers 氏と話すチャンスがあり、ほかの主な地方のギャラリーで日本画を展示していくことなどを話した。

メルボルンでの最後の日は、日本総領事館で千葉氏に結果報告をした。現地の領事館スタッフで、私達の前のメルボルン訪問の際にもずっと尽力された Kumiko Toyama さんとも話す機会があり嬉しかった。

それから私は、送迎観光バスで街の最後の観光をし、South Bank の World レストランで昼食をとり、ホテルで荷物を取ってスカイバスで空港に向かい、シドニー経由日本への帰路についた。この短い訪問が、6 月 15 日ハミルトンでの日本画ワークショップを行う 3 人の会員達のこれからの道程を助け、オーストラリアとの今後 35 年への発展に少しでも貢献できたならと願っている。

(訳：伊能祥子)

■ハミルトン雑記

中野真逸郎 (社)海外と文化を交流する会常務理事

「シッカロールってどこで手にはいるでしょう？」と、北條正庸画伯が云った。

「ベビーパウダーのことですね。スーパーとか薬屋さんですよ」と、味岡千晶女史が応える。2012 年 6 月 14 日、ハミルトン美術館長のダニー・マクオワン氏邸での遅い夕食の席だった。翌日 15 日は、美術館創立 50 周年記念「日本画展」での特別講演「日本画について」の、北條画伯によるレクチャー&デモンストレーション(レク・デモ)があるのだ。

「ベビーパウダーなんて、アセモですか」と、海外と文化を交流する会会長の太谷俊介氏が茶々をいれる。ここオーストラリアは日本とはちょうど半年、季候が違う。アセモができるわけがない。そんな茶々をいれるほどの、太谷会長と北條画伯の仲なのだ。

ハミルトンはオーストラリアのヴィクトリア州州都メルボルンから、ジェットプロペラ機で 50 分ほどの、羊毛で栄えた小さな町である。北條画伯、太谷会長、味岡女史そして中野は、さきほどハミルトンに着いたばかりであった。味岡女史はメルボルンのエッセンドン空港で合流した。

「画材の代わりにつかうんですよ。ついでにポマードもほしいなあ」という画伯に、中野が応えた。「ヘアクリームでもいいのかな、ムースならもってきてますよ。どうするんです？」

「銀箔を貼るのに、接着材としての膠(にかわ)の代わりにつかうんです。ベビーパウダーは、手がべたべたするのを防いで作業できるように、すべすべにする……」

13 日の夕方、成田空港で北條画伯のスーツケースから、中野のスーツケースに 10 キロほどの画材や資料を移動させた。画伯のスーツケースは重量オーバーになるのである。6 年前、30 年ぶりに開催する「現代日本画展」にも画伯にレク・デモをお願いした。その展覧会は、海外と文化を交流する会から豪州に寄贈した現代日本画 25 点をフィーチャーするものだった。そのときも画伯の荷物は重量オーバーだった。だから画材は現地調達できる

ものはそうしたい、でも「日本画」の材料は、日本でしか手にはいらない。代役ですませるものは、それにこしたことはない。

「では明朝、美術館に行く前に、私が手に入れましょう」と、中野が約束した。画伯が続ける。

「それと、なにか花がありませんか。お庭にあるものでいいんですが」

「花ねえ……オリーブの木ならあるけど」と、ダニー館長が応える。

「あ、その枝をいただけませんか。画材にします。葉の表は深いグリーンで、裏には産毛のような銀色がありますよね。銀箔をつかうのにちょうどいい……」

「なるほどなるほど」と、味岡女史が相づちを打った。

彼女はシドニー在住で、美術史家だった。シドニー大学美術館のキュレーターもつとめたこともある。日本人だと聞いていた。年の頃は、50台か……。味岡という苗字はめずらしい。高校のサッカー部の後輩にはひとりいたが……。

ハミルトン側では味岡女史とたいへん親しくしている。今回は日本美術に詳しい日本人の彼女が展示やパンフレット作成にも手を貸してくれたし、画伯のレク・デモで通訳してくれるから……でも、われわれとは初対面だったのである。大谷会長と味岡女史のメールのやりとりは中野もCCでくるものを読んでいた。

翌朝、画伯や会長より一足先に宿泊先のホテルから5分ほどの美術館前のスーパーめざして歩いていった。途中、「ジェームス・ディーン・ファーマシー」なる店舗が目についた。名前に惹かれてはいつい、ベビーパウダーを手にいれた。ジェームス・ディーンの時代にもジョンソンのベビーパウダーはあったよね、とおもいながら美術館へ向かった。

ハミルトン美術館は小さいが明るい。1階の受付のそばのケースの中には備前焼の藤原啓の作品が、さりげなく展示されている。そして1階にはレク・デモ会場が用意されていた。そこにはオーストラリア人あるいはイギリス人ヨーロッパ人の画家たちにより、オーストラリアで描かれた、印象派アートが展示されている。会場の奥中央に、作業台のような大きな机があった。そこで北條画伯が日本画についてレク・デモをするのである。頭上から真下にむけてカメラがあり、その作業を壁に映写するようになっていた。

「現代日本画展」の会場が2階にあり、我々には懐かしい25点の日本画が、展示されていた。

時間がきて、会場は70人以上の講衆が集まっていた。平日なのでお年寄りが多い。2時間も3時間もかけて集まってくださった方もいらっしやると、後で聞いた。

「はい、ダニー」多くの人びとが、館長にきさくに声をかけている。彼はハミルトン美術館第4代目館長で、ガラスや陶磁器ほか工芸美術研究の専門家。歴代の館長は2、3年の在任期間だが、ダニーは館長になって25年という。コレクションを増やし、「町のお役にたってます」から、人気者ではある。

ダニーが開催の辞、大谷会長が今回の開催のいきさつなどを挨拶とともにおこなった。つづいて画伯の講義がはじまった。通訳は味岡女史。

画伯は、展示してある川崎小虎「かいつぶりの群」(左)、池田遙邨「凍原」(右)を具体例として「日本画の鑑賞」について、講義した。



川崎小虎 「かいつぶりの群」

なにも描かれていない水面の下になにがあるのか、脚をたえず動かして泳ぐかいつぶり。なにも描かないという、白で表現するという技術、思想を感じ取ってほしいという。

●池田遙邨「凍原」

凍原に行く馬車は、なにを、どこを目指して旅しているのか。凍り付いた原野には手前右の枯れた草枝があり、凍原の厳しさを表す。遠い先には夕日か朝日か。沈みゆく夕日と、これから明るく照らす朝日は雲泥の差である。さて……。

ともに日本画のもつ思想性を感じ取ってほしいというのが画伯の望みだ。禅にも共通する日本人の思想・哲学。

この講義に中野も会長も、合点がいった。これから日本画の見方が変わってくる。北條画伯に大感謝だ。多摩美術大学の学生たちはいい先生をもっている。北條画伯はそこでの造形美術の教授なのである。

さて、実技にはいった。

画材の説明と講衆に手にとってもらって納得させる。つづいてオリーブの枝を画扇紙に描いてゆく。ささっと緑で葉を、茶色で枝を描き、膠の代わりにヘアムースを塗ってそれに銀箔を粉にして落とし、朱の落款を押して完成。オリーブを描いたみごとな「日本画」だった。傍にくるひと天井からの映写に見入るひと、知的好奇心旺盛な講衆だった。



レク・デモが終わってのランチ。そこでダニーに専門を訊く。

「日本の陶芸・工芸アートにふかく心惹かれます。日本にはなんども行きました。京都にも東京にも……」と、ダニーは目を細めた。

味岡女史に訊いた。

「味岡さんという名前はめずらしいですね。お名前は変わったんですか？ 日本はどちらのご出身？」

「いいえ、名前はこのままです。私は日本にいるときは練馬に住んでいました」

「ご兄弟は？」「兄がいます」「トオルという名前を聞いたこと、ありますか？」「え、兄です」

「やはりそうか、大谷会長と私はサッカー部同級生で、味岡くんは6歳くらい下だったから彼をコーチした覚えはありますよ」

会長も「え～、そうなお」と奇遇に驚いた。味岡徹さんは、現在中国文化史を専門とする聖心女子大学教授になっていた。

女史はオーストラリアに在住して、日本にたまに帰り、美術の研究をつづけている。そして日本に関する美術の仕事は、彼女に投げかけられる。ダニー館長は味岡女史に全幅の信頼をもつ。ダニー館長とハミルトン美術館を地域でサポートするレズリー・スロラッチさんも、チアキが大好きだ。

オーストラリアで活躍する味岡女史が日本美術・芸術を研究して、さらにすばらしい人脈も持つ。ヴィクトリア州美術館の日本画コーナーのスポンサーになっているポーリン・ガンデル女史が、このハミルトン美術館創立50周年「現代日本画展」のパンフレットにも資金を提供してくれた。アメリカその他に百貨店をいくつも持つご主人と、世界中を自家用ジェット機で駆け回る。日本大好きレディらしい。茶道の裏千家豪州会長だそうだ。

そういえば味岡松華園という茶道千家に縁の深いお茶、茶道具の老舗がある。ひよっとして味岡さんと関係が？……そんな考えも浮かんできた。

ともあれ、ダニー、チアキ、ガンデル、スロラッチ……日本と文化を共有する、そしてそのために日本を理解し、応援してくれようとする人たちが大勢いることを実感した。

こういった人たち、海外と、文化を交流することが、われわれ「海外と文化を交流する会」の役割だ。そんなことを、豪州での1週間、毎晩わが部屋に集まり、豪州ワインの杯をかたむけながら語っていた。

お知らせ & 報告

■9月29日「つどい」改め10月20日

会員の交流促進のための「つどい」をひらいています。

前号でお知らせした2012年9月29日(土)での、北條正庸画伯を派遣した「豪州ハミルトンでの現代日本画展」についての報告会は、北條画伯のオランダ出張のため、中止・順延とさせていただきます。あらたな開催日は下記のとおり。

日時：2012年10月20日（土） 午後4:00～5:30

場所：東京銀座4丁目2-1「銀座教会」地下集会室 tel. 03(3561)2910

会費：会員無料 会員以外の方は入場整理のため1000円をいただきます。

参加のお申し込み：田口朋子 電話・Fax: 03-3370-6786 address: (lala87@niftycom)

■会員の募集

海外と文化を交流する会は、すでに40周年をすぎました。ここまで、ずっと続けてきたのは、会員の皆さまのバックアップがあるからです。御礼申し上げます。

会としてさらにボランティアでの有意義な活動をしていきたい、そんな願いをこめて、常に企画を検討しています。

幸いに良質な会員の方々ばかりです。さらなる発展を期待し、新会員をご推薦ください。自薦の場合でも、理事会で面接いたします。事務局までファクスあるいは e-mail でお問い合わせください。

■会費納入のお願い

2011年度の年会費納入をお願いいたします。さらに2010年度2009年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。オーストラリアやニュージーランドに寄贈日本画の里帰り展も実現したいと思います。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 三菱東京UFJ銀行渋谷支店（普）2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000円（正会員） 5,000円（特別賛助会員） 3,000円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigai-bunka.org>